
■ PCN だより

PCN Volume 64, Number 2 の紹介 (その 1)

PCN Volume 64, Number 2 には外国からの投稿として Regular Article が 3 本, Short Communication が 3 本掲載されている。今回はこれらの内容を紹介します。

Regular Article

1. Clinical utility of the Chinese Version of the Pediatric Daytime Sleepiness Scale in Children with obstructive sleep apnea syndrome and narcolepsy

Chien-Ming Yang, Yu-Shu Huang, Yu-Chen Song

Department of Psychology, National Chengchi University, Taipei, Taiwan

中国語版児童用日中眠気尺度の閉塞性睡眠時無呼吸およびナルコレプシー児童に対する臨床的有用性について

【目的】中国語版児童用日中眠気尺度 (PDSS) の特性を調べ, PDSS の閉塞性睡眠時無呼吸 (OSA) およびナルコレプシーの十代患者における日中眠気のスクリーニングに対する有用性を調べた。【方法】中高生 238 名に PDSS を施行しその信頼性を検討し, さらに OSA (28 名), ナルコレプシー (31 名), 健常者 (34 名) についてその臨床的有用性を検討した。【結果】PDSS の結果は, 再テストによる十分な信頼性と, 十分な内部一致性を示していた。ナルコレプシー患者の PDSS 得点は, OSAS 患者より有意に高く, OSAS 患者の PDSS 得点は健常者と比較して有意に高かった。さらに治療後のナルコレプシー患者では PDSS 得点が低下していた。PDSS

尺度の信頼性と妥当性が示されたと考えられる。ナルコレプシーのスクリーニングとして PDSS 尺度の ROC 解析では, 16/17 点をカットオフ値とすると感度 87.1%, 特異性 74.3%であったが, OSAS のスクリーニングには十分ではなかった。【結論】PDSS は児童の日中眠気の評価に有用であり, ナルコレプシーのような重篤な日中眠気を示す病態のスクリーニングとして有用である。

2. Relationship of alexithymia and temperament and character dimensions with lifetime posttraumatic stress disorder in male alcohol dependent inpatients

Cuneyt Evren, Ercan Dalbudak, Rabia Cetin, Mine Durkaya, Bilge Evren

Bakirkoy State Hospital for Mental Health and Neurological Disorders, Alcohol and Drug Research, Treatment and Training Center (AMATEM), Istanbul, Turkey

男性アルコール依存症入院患者におけるアレキシサイミア, 性格特性・気質, 生涯 PTSD 有病率の関係について

【目的】アルコール依存症男性入院患者における PTSD 生涯有病率を調査し, PTSD 有病率とアレキシサイミア, 性格特性・気質との関係を調べた。【方法】男性アルコール依存症の連続入院患者 156 名について, Clinician Administered PTSD Scale (CAPS), Toronto Alexithymia Scale (TAS-20), Temperament and Character Inventory (TCI) を施行した。【結果】アルコール依存症入院患者の 32.1%に PTSD が認め

られた。アレキシサイミア得点, 新奇探求性 (NS) 得点, 危害回避性 (HA) 得点, 自己超越性 (ST) 得点は PTSD 群において有意に高かった。これに対して年齢と自己指向性 (S) は PTSD 群で低かった。TAS-20 の項目について, 回帰分析により “difficulty in identifying feelings-DIF” の高得点が PTSD を予想していた。年齢と TCI を独立変数とした場合に, 自己指向性 (S) の高得点は PTSD を予想していた。TCI の下位項目について, “impulsiveness vs reflection” (NS2) と “congruent second nature vs bad habits” (S5) の高得点が PTSD を予想していた。【結論】アルコール依存症入院患者において, アレキシサイミアと性格特性とは, 特に高い DIF 得点と S 得点とが PTSD の有病率と関係していた。アレキシサイミアや人格特性と PTSD との因果関係および治療についての意味を, 今後の縦断的研究により明らかにすべきである。

3. Randomized, single-blind, trial of sertraline and buspirone for treatment of elderly patients with generalized anxiety disorder
Naghmeb Mokhber, Mahmoud Reza Azarpazhoo, Mohammad Khajehdaluae, Arash Velayati, Malcolm Hopwood
 Department of Psychiatry, Avicenna Hospital, Mashhad University of Medical Sciences, Mashhad, Iran

高齢者の全般性不安障害に対するセルトラリンとブスピロンのランダム化単盲検試験

【背景】高齢者に多くみられる全般性不安障害 (GAD) に対する最適な治療法についての系統的な検討は少ない。高齢者 GAD に対するセルトラリンとブスピロンの有用性と安全性とを評価した。【方法】DSM-IV による GAD 高齢者 46 名について, セルトラリン (50~100 mg/日) あるいはブスピロン (10~15 mg/日) とにランダム化し単盲検法により 8 週間の効果を比較した。主要評

価項目として Hamilton Rating Scale for Anxiety (HRSA) を用いた。【結果】セルトラリンとブスピロンは両方とも有意な抗不安効果を示した。両薬剤ともに試験期間を通して一定の HRSA 得点の減少が見られた。2 週間後および 4 週間後にはブスピロンがセルトラリンと比較して有意に優れていたが ($p < 0.001$), 8 週間後には両者の間に有意差を認めなかった ($p = 0.16$)。8 週間後にセルトラリン群およびブスピロン群の HRSA 得点は有意に低下していた ($p < 0.001$)。試験期間中に臨床上の副作用や臨床検査異常を認めなかった。【結論】高齢者の全般性不安障害に対してセルトラリンとブスピロンは有効である。より多数のサンプルにより, 身体症状, 認知機能, 抑うつ症状, 精神療法や介入との組み合わせについての検討が必要であろう。

Short Communication

1. Rapid response to antipsychotic treatment on psychotic prodrome: implications from a case series

Chen-Chung Liu, Yi-Han Sheu, Szu-Ying Wu, Meng-Chuan Lai, Hai-Gwo Hwu

Department of Psychiatry, National Taiwan University Hospital, Taipei, Taiwan

精神病前駆状態に対する抗精神病薬治療の急速反応について: 複数例の経験から

精神病の前駆状態に対してどのような介入法が可能かについて議論されている。低用量アリピプラゾールの一週間の反応を 9 名の前駆状態と考えられる症例に対して検討した。前駆状態における病態生理学的過程は抗精神病薬により比較的容易に修正しうると推測されることから, 我々はハイリスク児 (ultra high risk of psychosis) に対して短期間低用量の抗精神病薬の使用が有効であると考えた。精神病開始時期における発症病理と薬物療法の理解のために精神病様症状の消退を注意深くモニターすることの必要性を強調したい。

2. The Prevalence of restless legs syndrome in Taiwanese adults

Ning-Hung Chen, Li-Pang Chuang, Cheng-Ta Yang, Cleo A. Kushida, Shih-Chieh Hsu, Pa-Chun Wang, Shih-Wei Lin, Yu-Ting Chou, Rou-Shayn Chen, Hsueh-Yu Li, Szu-Chia Lai
Sleep center, Pulmonary and Critical Care Medicine, Chang Gung Memorial Hospital, Chang Gung University, Taipei, Taiwan

台湾成人におけるむずむず脚症候群の有病率

【目的】アジア人種におけるむずむず脚症候群 (RLS) はヨーロッパ人種における頻度よりもかなり少ないといわれているが、アジア人種における RLS の有病率を調べた報告は少ない。RLS のさまざまな定義とその調査方法の問題からアジア人種における RLS 有病率の解釈には問題があった。本研究では台湾における RLS の有病率を検討することを目的とした。【方法】対象は 4011 名の 15 歳以上の台湾居住者であり、データは 2006 年 10 月 25 日から同年 11 月 6 日の間にコンピューターを利用した電話インタビューにより収集した。【結果】電話インタビューによる結果から台湾成人における RLS 有病率は 1.57% であった。RLS 患者は慢性不眠と他の慢性疾患の高い発症率を示していた。RLS とこのような慢性疾患との関連と長期予後について今後の縦断的観察研究が必要である。

2. A single-blind, comparative study of zotepine versus haloperidol in combination with a mood stabilizer for patients with moderate-to-severe mania

Hung-Yu Chan, Shaw-Hua Jou, Yeong-Yuh Juang, Ching-Jui Chang, Jiahn-Jyh Chen, Chiung-Hsu Chen, Nan-Ying Chiu
Taoyuan Mental Hospital, Taipei, Taiwan

中等症から重症の躁状態患者に対する気分安定薬と組み合わせたゾテピンとハロペリドールの単盲検比較試験

【目的】非定型抗精神病薬は急性躁状態に対して多く使用されるようになった。本研究は急性躁状態に対する気分安定化薬 (リチウムあるいはバルプロ酸) との組み合わせで使用するゾテピンとハロペリドールの有用性と認容性を比較検討した。【方法】多施設、ランダム化、評価者をブラインドにした自由用量の比較試験である。中等症から重症の双極性障害 (DSM-IV) の入院患者 45 名を、ランダムにゾテピンあるいはハロペリドールによる 4 週間治療に割りつけた。【結果】Young Mania Rating Scale 総得点ではゾテピン群とハロペリドール群との間に有意差を認めなかった (-23.7 ± 12.1 対 -22.3 ± 11.0)。両群の副作用は軽度から中程度であった。ハロペリドール群はゾテピン群と比較して、パーキンソニズムやアカシジアなどの治療薬に関する副作用の発生頻度が多かった。血清尿酸値はゾテピン群の方でより低下していた。【結論】気分安定化薬との組み合わせによる急性躁状態の治療において、ゾテピンはハロペリドールと同程度に有効であり、錐体外路系副作用や高尿酸血症が少ないという利点を有している。この結果は多数症例を用いた二重盲検法により確認する価値がある。

(文責：武田雅俊 PCN 編集委員長)